

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	山田 利博
論文題目	源氏物語の研究——機能的人物論による分析
審査要旨	
<p>山田利博氏の博士学位請求論文「源氏物語の研究——機能的人物論による分析」は、副題の示すとおり、『源氏物語』の形成において作中人物が果たす機能を探ろうとするものである。かつての作中人物論が、個々の人物のありようを論評するような傾向がつよかったのに対し、本論文は徹底的に人物の機能を掘り起こそうとしている点に特徴がある。</p> <p>山田氏は、2004年に『源氏物語』関係の既発表の論考をベースにして研究書『源氏物語の構造研究』（新典社）を上梓している。今回の博士学位請求論文は、その『源氏物語の構造研究』の一部分を活かしながらも、新たに「機能的人物論」としての体系的な『源氏物語』研究とすべく、書き下ろしの論考が加えられ、また既発表の論考にも全面的に手が加えられて、400字詰原稿用紙に換算して約800枚弱の論文にまとめられている。</p> <p>本論文のめざすところは、「研究史から見た機能的人物論の有効性」と題した序章において明らかにされている。膨大な量に及ぶ『源氏物語』関係の研究論文の中には、「作中人物論」と称されるものがある。近年では、安易な作中人物論に対する批判的意見も出されている。序章において、山田氏はそうした『源氏物語』の作中人物論に関する動向を総括した上で、進むべき道を確認している。すなわち、個々の作中人物に対して、人格を有した一貫性のある実体もしくは実存としてとらえるような立場とは一線を画し、あくまでも物語中の人物を「様々な機能の集積」ととらえようとするのである。それは、作中人物が物語形成に如何に寄与しているのかを問う、という基本的な姿勢の確認でもある。山田氏の研究テーマをあえてひと言でまとめるならば、『源氏物語』がいかに形成されていったのか、という点にあらう。そうした方向性は、この学位請求論文において一貫しており、その姿勢にブレはない。</p> <p>つづいて、全五章から成る本論部分について、第一章から順に主旨を確認した上で、それぞれの学術的価値について述べることとする。</p> <p>第一章の「単一人物と他要素との連関による表現法」は、具体的には玉鬘という一人の人物の造型に関する論考であるが、たとえば、初瀬と石山の霊験譚的要素、あるいは『源氏物語』中の「男踏歌」の用例に関する詳細な検討などをふまえて、この玉鬘を女主人公とする「玉鬘十帖」という大きな物語の形成方法を明らかにしてゆく。特に、「玉鬘十帖」全体と『竹取物語』との重なりなどにも言及した上で、この人物の存在が六条院の栄華と等価であったこと、またそれゆえに玉鬘が表層的な繁栄を続ける六条院の実相を暴くような立場にあることなどを論じている。「玉鬘十帖」が「若菜上」巻以降の、いわゆる『源氏物語』第二部に先立って光源氏の衰微を描く面があるということは過去にも指摘されてきたが、本論文のように、玉鬘という人物に焦点をしばった上で、そうした性質を明快に示し得ている点は貴重であるといえよう。</p> <p>つづいて、「人物の連関による表現法」と題した第二章、「人物の連鎖による表現法」と題した第三章、さらに「複数の人物連鎖とその統合による表現法」と題する第四章が並んでいる。章の題目だけ</p>	

ではいささか違いがわかりにくいですが、ここでの「連関」と「連鎖」との相違については、もちろん明確に示されている。すなわち、「人物の連関」とは、同時期に登場している複数の人物どうしが一つのテーマを支え合うような「横」の関係をさし、一方の「人物の連鎖」とは、物語の中で中心的に活躍する時期がずれている複数の人物どうしが「縦」につながって一つのテーマを支えるというような関係をさすとしている。

第二章では、当時の貴族女性が直面せざるを得なかった「ただ愛情のみによって結ばれる夫婦関係はあり得るか」という問題を物語化する上で、紫の上を軸として複数の女君たち（六条御息所・葵の上・花散里など）を連関させるという方法がとられていることを明らかにしている。一つの人格を複数の人物が分有しているというような把握の仕方はかなり独特であるが、たしかにそうとらえることで、この物語がリアルな世界を創造しつつ、一つの大きな問題を主題化しているのだという理解が可能となろう。

第三章と第四章は、複数の人物の連鎖的な造型による物語の展開を中心に論じている。第三章では、「薫と匂宮」「夕霧と柏木」「光源氏・冷泉院・明石姫君」の三組を例として、作中における人物の位置・役割などの連続性について、物語の展開とからめながら論じている。第四章は、「拒否する」（男主人公の求愛を拒みながらも本心では惹かれているタイプの）女性たちと、「忌避する」（男主人公と結ばれた後に心の葛藤が描写されるタイプの）女性たちの、それぞれに該当する登場人物すべてを検討した上で、両タイプが統合されて女性の生き難さを語る物語に結実しているということを論じている。従来の研究では、「ゆかり」論、あるいは「形代」論などで展開されていた作中の女性の連鎖という問題を、より多くの女性たちにひろげて、この長篇物語の生成・形成の特質を明らかにしている点が特徴的であろう。

第五章は「負の力の発見」と題されている。これは、第一章から第四章までの論述から浮かび上がってきた問題として、作中人物の有する「負」の面が実は物語展開の方法たり得ていることをとらえた上で、特に女三の宮と薫の「負」がもたらす作用を論じている。これらの人物についての「負」性はこれまでもとらえられていたが、それが『源氏物語』第二部・第三部における重要な方法としての「負」性であることが論じられたのは、貴重であるとおもわれる。

上述のとおり、本論文は、『源氏物語』の新たな人物論的研究を開拓した成果として、また『源氏物語』という長篇の形成についての新見解を有する論考として、早稲田大学における博士(文学)の学位に充分値するものと判断する。

以 上

公開審査会開催日	2007 年 12 月 25 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 准教授	博士(文学)	陣野英則
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		兼築信行
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院 准教授	博士(文学)	福家俊幸
審査委員			
審査委員			